

緩和ケアにおけるリンパ浮腫療法士の役割

大分ゆふみ病院 音山紀子

私は緩和ケアに携わるようになり 14 年目になります。これまでに、がん治療の影響などでリンパ浮腫を発症し、日常生活動作に支障を来し辛い思いをされている多くの患者さんとの出会いがありました。こういった患者さんが、苦痛を強いられている現状を目の当たりにする中で、もっとリンパ浮腫の治療やケアの方法について深く学び、専門的な知識と技術を身につけたいと考え、一昨年、日本医療リンパドレナージ協会認定医療リンパドレナージセラピスト・中級の資格を取得。今年、リンパ浮腫療法士の資格を取得しました。

日本において、がん治療やがんの病状悪化がリンパ浮腫の原因の多数を占めますが、これまで、このような原因で生じるリンパ浮腫は、治療やがんの病態によるものであり仕方がないと捉えられてきました。日本の医療においては、1990 年代後半よりリンパ浮腫ケアが特にクローズアップされてきましたが、今もなお知識や技術が浸透しつつある段階といえます。昨今では、リンパ浮腫が、がん治療やがんの進行に伴う 1 つの症状であることが社会的に注目されるようになり、2008 年度の診療報酬改定時にはリンパ浮腫指導管理料の新設、2010 年度の改定時には再算定が可能となりました。少しずつリンパ浮腫治療の必要性、重要性が認められてきているのではないかと思います。

リンパ浮腫ケアは、病期の段階に応じてのケアが必要となってきます。特に、私が携わる緩和ケアにおいては、単なるリンパの輸送障害のみならず、がんのリンパ節転移やリンパ管への浸潤、がんの増大による血管の圧迫、この他、全身的な要因による全身性浮腫が混在している難治性の場合が殆んどです。お一人お一人の浮腫の状態を的確に判断し、浮腫のケアをどこまで行うか、行うことが可能か、どの程度のケアが必要かなど、その方に合ったリンパ浮腫ケアを行うことが大切となります。また、身体的苦痛はもちろんですが、精神的苦痛も大きく、心のケアも重要となってきます。病状が進行しリンパ浮腫の状態が悪化してくるとこの先どうなっていくのだろうという恐怖感や不安も大きくなってきます。どのような状態にあってもあきらめずケアに取り組むこと、手を当て傍に居ること、気持ちに寄り添うこと、こういった関わりがとても大切であり患者さんの安心感へと繋がっていくのではないかと考えます。

可能な限りのリンパ浮腫ケアを行いながら、患者さんの心を温める手となれるよう努力していきたいと思っています。